

日本女子大学人間社会学部教育学科・教育学科の会共催

日女祭同日企画 講演会

つくってまなぼ！

— 久保田雅人氏に聞く造形教育 —

Japan Women's University Symposium:
A Lecture on Art Education by Masato Kubota
22nd October 2017

齋藤慶子、久保田雅人、渡邊 巧、田中雅文、吉崎静夫

Keiko Saito, Masato Kubota, Takumi Watanabe, Masafumi Tanaka, Shizuo Yoshizaki

執筆協力者（「プロジェクト実践演習Ⅱ」受講生）

伊東結菜、稲毛里菜、岩井由実、宇田川桃子、加賀谷晴菜、加藤夏来、小室洋絵、齋藤夏海、酒本瑤希、島崎郁美、杉浦有紀、鈴木彩那、鈴木しおり、関口美花、高澤里実、塚本茉莉菜、西山結実、橋本遥、日比野唯菜、藤井菜月、藤崎恵菜、藤間柚香、松添百華、松田彩花、三木咲慶、谷地田優姫、横山青空、吉川夏月、渡辺郁予

I. はじめに

2017年10月22日（日）10:20-11:50、日本女子大学西生田キャンパス九十年館A棟第1会議室において、日本女子大学人間社会学部教育学科・教育学科の会共催による講演会（日女祭同日企画・ホームカミングデイ）「つくってまなぼ！—久保田雅人氏に聞く造形教育—」を開催した。講師は、NHK教育テレビ（Eテレ）の工作番組『つくってあそび』に「わくわくさん」役として出演した久保田雅人氏⁽¹⁾であった。

本講演会は、教育学科専門科目「プロジェクト実践演習Ⅱ」（授業担当教員：齋藤慶子・渡邊巧）の受講生を中心として、企画・準備がおこなわれた。講演会当日の運営には、「プロジェクト実践演習Ⅱ」の受講生の他に、教育学科の会・学生委員も従事した。

当日は、台風の悪天候であったが、教育学科の学生や卒業生、地域住民の方々を中心に、約50名もの参加者があり盛会なものとなった。以下に講演会の記録（要約）を示す。紙面構成の都合上、内容や



写真1：当日の様様

順番を編集している。また、本報告書の表記において、講演記録（Ⅲ章）は口語としているが、それ以外の各章は、文語・常体に統一している。

Ⅱ. 「プロジェクト実践演習Ⅱ」の取り組み

本講演会は、「プロジェクト実践演習Ⅱ」の受講生らによって企画されたものである。

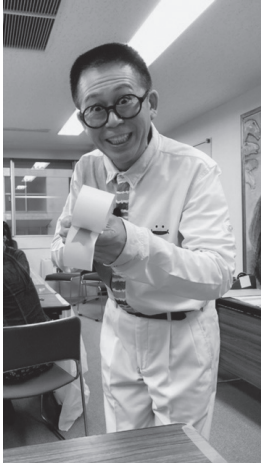


写真2：久保田雅人氏

まず、「プロジェクト実践演習Ⅱ」の取り組みを報告する。本科目は、学生たちが、講演会⁽²⁾やシンポジウムを企画・立案し、運営に携わる中で、本学の建学の精神である「自学自動」的な学びの体得を目指すものである。

今年度は「自学自動的な姿勢で取り組む」といった態度面だけでなく、以下の3つの能力を育てることを目標とした。それは、「①企画内容を立案・検討する（考えを設計・企画する力、コミュニケーション能力の獲得）」、「②役割分担を行い、講演依頼、広報、当日の運営を学生主体で実施する（企画を実行・運営する力、チーム活動能力の獲得）」、「③企画・運営した内容についてプレゼンテーションを行う（プレゼンテーション能力の獲得）」である⁽³⁾。これらの能力は、社会人の基礎として求められるものと考えられる。

実際の「プロジェクト実践演習Ⅱ」は、以下の5つのパートでおこなった。講義の時間以外に昼休み等も利用して準備を進めた。

パート1は、オリエンテーションとして、演習の目標と趣旨説明、グループ分けをおこなった。また、教育学科4年生の協力を得て、昨年（2016）度の成果共有の機会を持った。

パート2は、講演会ゲストの検討をした。ゲストは、各グループで企画を作成し、クラス全体に対してプレゼンテーションをし、投票の結果で決定した。学生たちからは、「女性の社会進出について考えたい」「教員免許を持っている芸能人を招きたい」

といった希望が挙げられた。こうした経緯の中で、「女性警察官、女性スポーツ選手、西生田キャンパスの女性警備員、日本女子大学出身の社長、久保田雅人氏」といった具体的なゲスト案が出されることになった。当初、久保田氏を希望する学生の多くは、幼稚園教員や小学校教員を志望するものであったが、検討を進める中で久保田氏の生き方にも関心が寄せられ、多数の受講生が賛同しゲストとして招聘することになった。

パート3は、久保田氏を招聘するにあたって、具体的に聞きたい事項や講演会のタイトルの検討をおこなった。学生の代表者を司会として、主体的・積極的な議論がなされた。

パート4は、久保田氏に関する事前学習をおこなった。事前学習は、大きく2つの内容で構成した。

1つ目は、教員からの情報提供である。齋藤と渡邊から資料を配布し、久保田氏の経歴等を説明した。『つくってあそぼ』のDVDも視聴し、イメージを深めていった。クラス全体で共通理解を図り、全ての学生が演習に参加していく土台形成をねらった。

2つ目は、各グループにおける調べ学習である。コンピュータ演習室を利用して、情報収集をし、レジュメやパワーポイント等の形式で発表をさせた。具体的なテーマとしては、「幼児教育テレビの変遷、教育テレビの裏側」といった放送教育に関するものや、「図画工作科が教育に与える影響」といった学校教育（教科教育）に関するもの、「造形作家について」や「つくってあそぼ」の監修者で造形作家の「ヒダオサム氏」について等があった。

パート5は、「交渉・統括」「広報」「運営・企画」のチームを編成し、それぞれ作業を進めていった。

交渉・統括は、久保田氏や教員（齋藤・渡邊）との連絡や各チームの作業指示等の役目を担った。クラス全体で協議をする場面では、司会として中心的な働きをした。広報は、チラシやポスターの作成等をおこなった。また、広報活動の一環で、オリジナルグッズの作成も学生から提案された。「工作でも使えるものをグッズにしよう」といった方針の下、定番のファイルやエコバックではないものとして、オリジナルのマスキングテープ作りがおこなわれた。費用は、「教育学科の会」より支援を受けた。



写真3：学生によるオリジナルのマスキングテープ

運営・企画は、当日のプログラム作りや司会進行等の役目を担った。これら3つのチームと教員2名が連携を取る形で企画がおこなわれた。

最終的な講演会は、後期の授業期間となったが、受講生たちは前期終了後も打ち合わせ等で集まり、主体的に準備をしていた。また、演習の中で「予算の立て方」や「メールの出し方」といった基本的なスキルについても教員が指導をおこなった。

Ⅲ. 講演会の要旨

1. 開会挨拶・講師紹介

【司会】本日は、教育学科・教育学科の会共催「つくってまなほ！－久保田雅人氏に聞く造形教育－」にお集まりいただきありがとうございます。

司会を務めます、教育学科2年の加藤・島崎です。私たちおよび、本日の受付や会場設営をおこなった学生スタッフは、齋藤慶子先生と渡邊巧先生が担当された「プロジェクト実践演習Ⅱ」という教育学科の授業のなかで、本日の講演会の準備を進めて参りました。

ここで久保田氏のご略歴について、紹介いたします。久保田氏は、1961年に東京でお生まれになりました。立正大学文学部史学科在学中に中学・高校の社会科の教員免許を取得されましたが、大学4年生の時に声優の三ツ矢雄二氏と田中真弓氏が設立した劇団「プロジェクト・レビュー」の1期生となり、卒業後は役者の道に進まれました。1989年4月から、NHK教育テレビの工作番組『つくってあそび』に「わくわくさん」役として23年間、出演されました。また、全国各地の幼稚園や保育園で工作教室をおこなうなど、現在も多方面でご活躍され

ています。

2. 学科長挨拶

【司会】本日、公務のためやむなく欠席となってしまう教育学科の田中雅文学科長からのお手紙を齋藤先生にご紹介いただきます⁽⁴⁾。

この度、私ども日本女子大学教育学科の念願がかない、久保田雅人さんにお越しいただくことができました。本当にありがたいことだと思っております。久保田さんには、ご多忙にもかかわらず、この日女祭同日企画として行う講演会をお引き受けくださいましたこと、心から感謝申し上げます。

私ども教育学科では、教員養成課程をもっており、毎年卒業生の約半数が小学校あるいは幼稚園の教師として巣立っていきます。近年の学校では、児童の多様化にともなって、授業が子どもたちにとっていかに魅力的であるかが重要になっております。一言でいえば「楽しい授業」です。私どもの卒業生がそのような授業をおこなううえで、今回の造形教育の講演会で学ぶことは貴重な財産になると思います。

一方、企業等に就職する学生たちも、将来は家庭や地域で子どもたちの創造性を育むための役割を担っていくこともあるかと思います。職場においても、さまざまな工作技術をもっていることで、人間



写真4：フロアで参加者と交流しながらの工作指導

関係の輪を広げることができ、場合によっては新商品の開発に役立つかもしれません。

今回の講演会は、このように学生たちの将来を豊かにしてくれる貴重な機会だと思っております。ぜひ、久保田さんご自身も、学生たちとの交流を楽しみながら充実した時間を過ごしてくだされば嬉しく思います。本日は、どうぞよろしくお願い致します。

3. 講演

ご紹介にあずかりました久保田です。NHK 教育テレビ（Eテレ）の番組『つくってあそぼ』で「わくわくさん」役として、いろいろな工作を紹介させていただきました。今日は、私がいろいろと感じたことをお話し致します。それから、皆さんにも一緒に工作を実際にやっていただきたいと思います。最後までよろしくお願い致します。

（1）番組誕生の秘話パート1

A. 番組づくりの苦労

番組が終わって、早4年も経ちます。番組の話からしましょう。

実は、番組は2種類ございました。『つくってあそぼ』、15分枠で土曜日なんかに放送してありました。もう1本、『つくってわくわく』。子どもたちは、お家に帰ってから見られるので、『つくってわくわく』が本編だと思っているのですよ。いやいや、『つくってあそぼ』が本編でした。

どういう風にして撮影していたのかとよく聞かれました。ご覧になった方はお分かりいただけると思いますが、いくつかのパートに分かれていましてね。これを抜粋したのです。実は、ここで問題が1つおきました。『つくってわくわく』は、『つくってあそぼ』を抜粋した箇所と、新たに撮り直した箇所があります。そのため、下手をすると15年前の作品になることもあります。ということは、番組の中で、瞬間的に若返ったり老けたりしていました。あの番組には、実はこういう楽しみ方もありました。

そして、『つくってあそぼ』は毎週撮っているのですかとよく聞かれました。いやいやいや、違うんですわ。ものすごく大雑把に申しますと、月4週ございますね。この内の3本、3週は再放送だったんです。新作は月に1本くらいのペースだったんです。この1本を撮るのに、木・金・土と3日かかる

んです。木曜日に工作のリハーサルをやって、金曜日に「ゴロリ君」の声を収録して、土曜日に本番でした。この本番も、スタジオの照明さん、音響さん、カメラさん、技術のスタッフの皆さんの打ち合わせから入ると、おおよそ7時間。7時間で、15分の番組が1本です。ということは、みなさんが見ているドラマがどれだけ大変かというのが想像つくと思います。テレビというのは、こんな風にして放送されている訳ですな。

工作に関しましても、楽しく見せるコツ、面白く見せるコツ、そういうのがあるんですよ。工作のアイデアは、すべて造形作家ヒダオサム先生のアイデアです。

B. 番組の意図と設定

「ゴロリ君」は5歳です。彼に関しては、放送中からいろんな噂が飛び交っておりましたが、熊ですよ。彼は、グレートという犬も飼っていたんです。テレビ画面で、右側に私の家がありましたね。あれを作ってくれたのは、「ゴロリ君」のお父さんという設定だったんです。「ゴロリ」は、大家の息子。私は、居候。そういう関係だったんですな。

「わくわくさん」は、平成2年からずっと20代後半の設定です。職業は、世界を股にかけて活躍するデザイナーという設定だったんです。知らなかったでしょう。

つまり、子ども代表の「ゴロリ君」なんです。大人代表の「わくわくさん」だったんです。子どものアイデアを大人の「わくわくさん」が形にしてあげる。それを2人で作ってゲームをして遊ぶ。こういう設定だったんですな。

私の前は、学生さんは知らないと思いますが、『できるかな』の「ノッポさん」でした。「ノッポさん」の頃は、幼稚園といった園単位、クラス単位で見て欲しいという思いがあったので、大きい工作が多かったです。段ボール箱とかいっぱい使いました。『つくってあそぼ』になってからは、親子みたいな関係なので小さい工作が多かったですね。

ついではなんですが、よくゲームのコーナーについて「わざと負けてるんですか」と聞かれることがありました。台本無しのアドリブでやっていました。これはなぜかという、若い人たちは是非覚えておいて欲しい。子どもというのは、大人の

変な嘘を見抜くんですよ。変な段取りを見抜くんですよ。あのシーンは、真剣にやっているから子どもたちは面白いんだよね。やっぱり、見せる側、大人の側がどこまで真剣に子どもと向き合えるか、真剣に遊べるか。子どもは変な嘘を見抜くよ。そういうのを覚えておいてください。

(2) 久保田さんの子育て

私もこう見えて、3人の子持ちです。3人とも、二十歳を超えてしまいました。だから皆のお父さんくらいだよ。「わくわくさん」は、20代後半だけど。

若い学生さんたちに聞いておいて欲しいと思うのは、3人とも別々の出産方法をとったんだよ。1人目は、うちのかみさん自信が無くて、大阪の実家に帰って産んだんです。私は仕事で東京におりまして、離れ離れだったんだけど、何となく分かったもん。あ、産まれたかなって。2人目は、自信がだったので東京の病院で、3人目は自宅出産をしました。かみさんの意思を尊重して。本人がやりたいという方法でやったんですよ。息子が生まれたのが夜中で、俺がへその緒を切りました。私は、仕事柄、365日はさみを使うんだけど、あの時だけですわ、はさみが震えたの。もちろん、助産婦の先生がこう持っている真ん中を切るんですが、間違えたらどうしようとかね。

3人とも元気に大きくなってくれたんで良かったかなと思っております。ただ、なんと申しましょうか。うちの子たちは可哀そうなもので、お父さんとあんまり出かけたことがございません。つまり、皆さんが休みの日にお父さんが仕事な訳です。お父さんと海に行ったことがないんですよ。夏の間、泳ぎに行ったことがないの。お父さんが日焼けできないんですよ。9月に収録する番組というのは、下手すると12月くらいに放送なんです。真っ黒に日焼けした顔で、メリークリスマスという訳にはいかないんです。

ただ、1つ、あくまで父親として良かったなあと思えるのは、自分の子にお父さんが外で何をしているかを見せることができた。これだけはちょっと良かったかな。普通のお勤めの方は、営業先に子どもを連れていく訳にはいきませんし。そういう意味だけでは、ちょっと良かったかなあとと思いますねえ。

皆のお父さんくらいの年齢です。こんなお父さん



写真5：工作を楽しむ参加者たち

だったらどうする。大変だろう。そんな話置いといて。話が長くなりました。

(3) 工作とはさみ（工作内容は省略）

ちょっと、工作いきましょうか。色画用紙をご用意ください。それとね、はさみをご用意ください。そんな難しいもんじゃありませんよー。まずは、ちょっと私だけやります。そして、私も出来るだけ、皆さんのところをまわりたいと思いますが、私一人だけでは手が足りません。私のアシスタントの山田リイコです。山田もまわりますので、分からないことがあったら聞いてください。

(4) 番組誕生の秘話パート2

話が前後しますが、どうして「わくわくさん」役になったんですかと聞かれることがあります。

私、大学では、教育学部でもなければ、美術でも造形でも何でもないんです。先生には、なりたかったです。本当は、日本史の先生になる予定だったんです。で、大学4年生になった時から演劇を始めちゃったの。その理由がね。大学の近くの本屋さんで立ち読みした雑誌に、私が最初に所属した劇団の第1期生募集っていうのがあったんです。それを見て、ふらふらと応募して、オーディションを受けたら、受かったちゃったの。立ち読みで人生が変わっちゃうんです。同じ劇団に『ワンピース』の「ルフィ」役の田中真弓さんがいらして、そのご縁で、NHKのオーディションを受けました。

実は、平成元年に試作番組を放送しているんです。試作番組のタイトルが、驚くかなれ『わくわくおじさん』というタイトルだったんだ。俺まだ26

歳くらいだ。その年の12月にもう1本、試作番組を放送して、その時に初めて、「ゴロリ」が登場した。平成元年の時点で5歳だから、今年で。そういうこと言っちゃいけない。

この2つの試作番組のオンエアを実際に見ました。下手くそでね。絶対、こんなのレギュラーになる訳ない。2本で終わりだと思ったら、平成2年の4月からレギュラー放送化になったんです。番組が始まってから、ディレクターさんとヒダ先生が、長い目で見守ってくれました。そしたら、23年になった。以上、「わくわく」誕生秘話でした。

若い皆さんにも覚えておいて欲しいんですが、世の中何が起きるか分からない。人生っていうのはそういうもんだ。いろんなことにチャレンジして欲しいな。選択肢をいっぱい持って欲しい。若い人は。何かそんな人生を歩んでくれるとすごくいいなと思います。

もう一つだけ、これは私も業界の中にいて思ったんですが、生き抜くコツみたいのじゃないけど。覚えておいていいのがね。これ、谷川俊太郎さんの詩で、「ほんとのなかにほんとを探すな。ほんとのなかにうそを探せ。うそのなかにうそを探すな。うそのなかにほんとを探せ」（「うそとほんと」とより）といったものです。これは人生を生き抜くコツです。

（5）工作と「もったいない」の心（工作内容は省略）

工作（をすること）は、子どもたちにとって、はさみを使う練習にもなります。遊びながらの練習です。（皆さんも）子どもたちと遊んでみて下さい。

こんな風に紙1枚で（出来ま）す。紙1枚で4つも作れちゃう。ほとんど、ゴミが出ません。今（世間では）、「もったいない」という言葉を子どもたちに教えようとしています。私は、言葉だけ教えるのは、非常に不味いと思っています。違うと思っています。やっぱり、こういったところからでもいいから、物を使い切るということを教えないと「もったいない」という言葉の意味は、伝わらないと思うんです。子どもたちに、実体験させずして、言葉だけで、「もったいない」、「もったいない」って教える方が、間違いだと思うんだよね。子どもたちには、こういうところからでもいいから、紙1枚で使い切る。そういうことをやらせて、生活の中でやらせた



写真6：作った作品で遊んでみよう！

上で、初めて「もったいない」という言葉を教えるべきじゃないかな。

言葉だけじゃないんだよ。やっぱり、なんていうかな、実体験を踏んで人間っていうのは覚えていくもんなんだから。ぜひ、そういうことで頑張ってみてください。

てなことを言っているうちにお時間が来てしましまして、以上でおしまいでございます。

4. 質疑応答

私、一人だけ、ずっとべらべら喋って参りましたので、ここでちょっと質問コーナーです。私に聞きたいことありますか。

<p>[学生A] いろんな講演会で工作をされていると思います。子どもに分かりやすいように伝えるポイントや気を付けていることを聞きたいです。私は、教員を目指しているので、子どもたちの関心を引くコツを知りたいです。</p>

いろんな例があります。まず1つは、自分が楽しいかどうか。自分がやっぱり面白い、自分が楽しいと思うから、その気持ち伝わる訳ですよ。子どもにね。最初にちょっとお話ししましたが。やっぱり、そういう点は、うそを子どもは見抜く。本当に自分が楽しいかどうかだね。面白くやっているかどうか。工作を楽しく見せるコツは、大人（先生）がお手本を見せる時に、子どもたちに「わーすごい」と思わせること。「わーすごい」と思うから、子どもたちはやってみようと思う訳。もしかしたら、工作に限らず、全部そうかもしれないね。僕は、その

2つをポイントにしています。

[学生 B] 子どもに工作をさせる時は、紙に線を書いておいて、それを切った方がいいですか。

お子さんの年齢層にもよるんですが、一番確実なのは線を引いてあげる。線を引かせるというんでしょうかね。それを切ってごらんでいいと思います。線を引く時も、例えば、子どもたちの前で線を引く時に、ちょっと自分でリズムをつける。自分でアドリブ的に、言葉、擬音をつけるとかね。私なんか、時々やるのは「は！、ちゃんちゃん、ちゃかちゃか、ちゃんちゃんちゃか、ほい。ここで止める。」とやります。そうすると、子どもたちも聞いてくれる。黙ってずっと引くよりは、ちょっと面白おかしく、芸人の芸の域に入っちゃうんですが、そんな風にしてもいいかと思います。

[学生 C] 今日はありがとうございました。話す時に、目線とか間の取り方とか、久保田さんのように人を惹きつける話し方をするには、どんなことに気を付けたらいいか教えていただきたいです。

私の場合ね、本当のことを言うと、高校を出るまで落研にいたんです。だから、ちょっと囃家さんっぽいしゃべりでございます。間の取り方っていうのは、これも自分で、体験なんですよ。自分でいろんな人とお話しをする中で、身に付けていくもんなのね。これは、それこそ友達との会話なんかも、全部そうですよ。本当にね、これも人生論に近くなっちゃうかもしれないけど。日々、全てやるのが勉強なのね、人間って。例えば、先生なんかも絶対そうなの。人を見る目とかね。人と話す時、どういう風にしゃべったらいいかなあとか迷う。それはどうやって勉強するかと思ったら、日常の中だということです。全てが勉強だからね。

そういう時に、一番できたら最高なのは、俺もできないんだけど。それを見据えるここにいる自分。例えばね、私なんかでいうと、「わくわくさん」役としての自分、久保田雅人としての自分、それから家に帰ったら父親としての自分、これがある訳。この3人を操るような自分ね。3人を見つめる、上か

ら見つめる自分、これができたら最高なのね。そうすることによっていろんなことが見えてくる。自分のミスが見えてくる。自分のいい点も見えてくる。そんな風に考えてください。

本当に最後までお付き合いありがとうございました。

5. 御礼と閉会の挨拶

[司会] 本日はお忙しい中、日本女子大学にお越しいただきましてありがとうございました。私たち学生は、『つくってあそぼ』など久保田さんの番組を、テレビにしがみ付きながら見ていた世代でした。本日、このようにお話を聞いたり、一緒に工作できたりしたことが夢のようです。今日の講演を受けて、私たちは、「子どもたちにとってワクワクドキドキするような教育を、どのようにおこなえばいいか」ということを考えていこうと思いました。

Ⅳ. 「プロジェクト実践演習Ⅱ」受講生の感想

本講演会の企画・運営は、前期の授業期間中から後期に至るまでの長期的なプロジェクトとなった。受講生たちの授業の感想を検討する。

本授業は「自学自動」的な学びの体得を目指しているが、ほとんどの学生にとって「講演会を企画する」ことは初めての経験であり、何をどのような段取りで準備し企画立案・運営していくのかは「未知の領域」であった。

例えば、「講演会の企画は初めてのことで、授業の最初の頃は講演会を開催するところまでたどり着けるのかと不安でした。」(学生1)、「このプロジェクト実践演習で、講演会を企画し、開催することの難しさを感じました。誰を呼び、どんなテーマにするのかを決める段階では先のことに不安がありました」(学生2)、「プロジェクト実践演習を通して、講演会を企画し開くことの大変さを実感しました。今回の授業で初めて“講演会を自分たちで開く”という体験をさせて頂いたので、自分たちで出来るのだろうかという不安がありました」(学生3)といった感想は、授業開始当初、「未知の領域」に主体的・自律的な姿勢で取り組むことへの疑問と不安を抱えていたことを示している。では、授業を進めていく

中で、授業開始当初の疑問や不安をどのように解消し、何を身に付けていったのか。

まず、授業では、講演会のテーマを決定し講演者を選定したが、その際、単なる興味関心だけでは決定できない難しさに直面した。「講演者を選ぶ際にはただ面白そうなどの理由だけでなく、予算・日程・交渉の問題などさまざまなことを考慮していく必要があります」と（学生4）、「講演内容を考慮しての人選や、その後も交渉や日程調整、予算の関係など、簡単に開けないものだとわかりました。」（学生5）といった感想は、難しさを感じながらも、「呼びたい」「聞いてみたい」という思いを実現するための手立てを獲得したことを示している。

学生たちが、こうした不安や困難さを話し合いやプレゼンを重ねる中で解消していったことが次に挙げる感想から読み取ることができる。「皆と話し合ったりプレゼンをしたりという行程を重ねる度に、皆の考えから学び取る事が沢山あり、やりがいを感じるようになりました。」（学生6）、「毎回の授業で講演会の名前をどうするのか、どんなことを狙いにするのか、内容にするのかなど、みんなで考え、話し合いをしていく中で、講演会への不安が、楽しみに変わりました。」（学生7）からは、「不安」が「やりがい」や「楽しみ」へと変化したことを窺うことができる。

また、講演会への準備を進める中で身に付けたスキルについて具体的に述べている感想もみられた。たとえば、久保田氏とのメール連絡を担当していた学生は「はじめはビジネスメールの送り方を知りませんでした。やりとりの中でビジネスメールの使い方を覚え身に付けることができました。これは将来とても役に立つことだと思います。」（学生8）と記している。グッズ制作にあたった学生の感想にも「業者選びからデザイン入稿、発注まで全てが初めてで、分からないことも多く、何度も業者とのやり取りを行いました。その中で、メールの送り方や電話での言葉遣いの難しさ、金銭のやり取りの責任を学びました。」（学生9）とある。こうした感想からは、授業での主体的な学びと教員のサポートによりメールの出し方や電話の仕方、金銭のやり取りが伴うことで発生する「責任」の重さなど、社会人としての基礎的なスキルと取り組みの姿勢を身につけ、

学生自身もその有用性を実感していることがわかる。

さらに、授業での経験が視野の広がりに繋がったことを指摘する感想もあった。「求められている動きができないことも多かったですが、今回やったことでこれからは主催者側としての気の持ち方やどんな対応を求められているのかを少しは学ぶことができましたと思います。」（学生10）や、「主催者・参加者どちらにとっても楽しめる講演会を作るには、広い視野を持って準備・企画することが大切だとわかりました。」（学生11）には、「主催者としての視点」から考えることを学び、面白さだけでは成立しない講演会開催のための多角的な視点を獲得したことが記されていた。

最後に、授業と講演会を終えて獲得した「達成感」に関する学生の感想を紹介する。以下の表1を参照していただきたい。学生の感想からは、講演会

表1：「達成感」に関する感想

実際に受講してみて講演会を自分たちの手で一から作り上げ、実施することができ達成感を感じるとともに、自分たちでも企画～運営まで計画を練って行うことができるのだと感動を覚えました。
自分たちで企画してきた講演会が実現していることに喜びを感じました。また久保田さんの興味深いお話や、画用紙での工作はとても面白く楽しくて、とても印象に残っています。
当日までたくさんするべきことがあり、様々な役割でたくさんの人が動いて出来上がった講演会は、とても達成感がありました。これからこの経験を活かしていきたいです。
先生方からアドバイスをいただきながら、学生が主体となって役割分担をして、グッズ作成や当日の司会進行を行った経験を、これからの学生生活や、社会に出た時に活かしたいです。
納期を守りながら進めていくのは大変だったけれど、グッズが出来上がり、手元に届いた時の達成感は大きかったです。この授業で学んだことを社会に出て役立たせたいです。
終えてみてとても楽しくなったと思いました。この授業で学んだことを今後の将来に活かしていきたいです。

（下線は、筆者らによる。）

開催を経験し概ね達成感を感じるとともに、今後に役立たせていきたいと考えていることがわかる。

また、学生は、「プロジェクト実践演習Ⅱ」の授業展開に対して、教員から学生への一方向的な授業とは異なり「時間がかかった」としながらも、時間がかかった分「達成感もあり普段の座学の授業とは違うものを得ることが出来」た、「普段のグループ学習とは違う、頭を捻らせる新鮮な話し合いだった」と述べている。こうした授業の過程で学生が感じた達成感や充実感は、教員と学生、および学生同士が双方向のコミュニケーションをとりながら展開した「プロジェクト実践演習Ⅱ」の成果であると考える。

V. おわりに

本講演会とそれに至る諸活動は、どのような教育的な意義があるのだろうか。「教育学科の会」担当教員の3名が、それぞれの視点から見解を述べて結びとする。

1. 教員のまとめ（渡邊）

「プロジェクト実践演習Ⅱ」の目標は、企画を立案・実施していく力を身に付けていくことであった。演習の中では、様々な条件や制約の中で、仲間と協働して、調整・交渉をおこなう学生の姿が随所で見受けられた。

こうした力は、社会人の基礎であるだけに留まらず、学校教員にとって大切な能力となるだろう。学級経営や特別活動等はもちろんであるが、日々の教科指導を考えていくことも、一種の企画といえる。同僚や保護者、地域の住民、専門家とチームとなり、創造的な教育実践をおこなう上で、今回の経験がいきることを願っている。

受講生の皆さんは、本演習を通して、どのような気づきがあっただろうか。今回の取り組みを振り返り、次の学びを見つけ出していくことを期待したい。本報告書がそのきっかけとなることを願う。

2. 教員のまとめ（齋藤）

「プロジェクト実践演習Ⅱ」は、学生の授業に対する考え方の「質の変化」を求める授業である。教員が主体的に授業をつくりあげていくのではなく、

個々の学習者が主体的に学ぶ学生中心の授業であり、教員はあくまで学生たちの主体的・協働的な学びを見守りながら、授業の趣旨から離れないように軌道修正していく役割を担う。そして、様々な考えを認め合い集団として考えをつくりあげながら企画を立ち上げ、運営していくという学生の活動は、授業への参画意識が鍵となる。こうした考え方の「質の変化」と参画意識の育成は、男女共同参画社会を創り上げていく姿勢にも直結することであり、「自学自動」を建学の精神の一つとする日本女子大学ならではの科目としても位置付けられる授業である。

また、久保田氏に講演を依頼することを決定するまでには、学生たちは、何度も「話し合い、調べ学習、発表」の過程を繰り返し、「なぜ自分たちがそのテーマで講演会を開きたいのか」という学生とテーマの関連性をじっくりと考え見つめてきた。現在、教育学科の学生の半分は教師に、半分は教師以外の道に進んでいる状況を考えると、教員免許をもちながら教師以外の道に進み、かつ教師ではないが教育に携わってこられた久保田氏は、学生たち自らの縮図のような存在ともいえる。そうした久保田氏から講演会で繰り出された「チャレンジする姿勢の大切さ」や「人生の選択肢をたくさん持つことの大切さ」、そして「生き抜くコツ」といったメッセージは、学生たちの未来を切り開く非常に意義深いものであったと考える。

3. 教員のまとめ（吉崎）

「プロジェクト実践演習Ⅱ」の活動について、「つながる」をキーワードとして、その特徴を述べてみる。

1つ目は、「学校（大学）での学び」と「社会での学び」がつながっていることである。つまり、この演習に参加した学生たちは、講演会を企画・運営する際に求められる事柄（能力・態度）を授業の中で学ぶことが、社会に出て仕事をする際に求められる事柄（能力・態度）につながっていることを実感している。例えば、このことは、「終えてみてとても楽しくなったと思いました。この授業で学んだことを今後の将来に活かしていきたいです。」「納期を守りながら進めていくのは大変だったけれど、グッズが出来上がり、手元に届いた時の達成感は大きかったです。この授業で学んだことを社会に

出て役立たせたいです。」といった学生の感想に見られる。そこには、学習意欲の源泉の1つである「有用性（学習することが役に立つという感覚）」がある。では、なぜうまくいったのだろうか。その主な理由は、この演習の目標が、「ホームカミングディで講演会を開催すること」というように明確であり、学外の人々（卒業生や地域住民など）にも公開する意味で「社会的なもの」だということにあるように思う。つまり、この演習での学びは、「真真正正な学習（authentic learning）」であり、まさに「本物の学習」だということである。

2つ目は、「演習に参加している学生」と「教育学科の会の卒業生」がつながっていることである。この「ホームカミングディでの講演会」は、教育学科と教育学科の会の共催で行われている。そこでは、講演会に関わる諸経費を学科と学科の会で折半している。学科の会の卒業生が、学生が主体的に企画・運営する講演会を財政面ばかりでなく、精神面でもサポートしている。学生にとっては、これほど心強いことはない。しかし、同時に強い責任感をもつことになる。ここには、学生の主体的・協働的な学習を支える「実践共同体（実践コミュニティ）」が構築されている。

3つ目は、計画（Plan）、実践（Do）、評価（Check）、改善（Action）の4つの側面がうまくつながっていることである。つまり、この演習では、PDCAサイクルがうまく機能している。学生たちは、主体的・協働的に講演会を企画・運営するとともに、そのプロセスを冷静に振り返っている。そして、その改善案を次年度受講する学生に申し送りしている。このようなPDCAサイクルが継続されることによって、この演習はさらにグレードアップしていくことは間違いない。

【参考文献】

- 久保田雅人「ネタモトNo.002「つくってあそぼ」ワ
クワクさん」『ケトル』Vol.34、2016年、p.9。
久保田雅人「子供と遊びと「もったいない」につい
て」『情報処理』Vol.56、2015年、巻頭。
久保田雅人「ものづくりは、生命を生み出すこと」
『教育ジャーナル』第53巻第11号、2015年、
pp.46-51。

【註】

- (1) 久保田雅人氏のウェブページ等は次の通りである。ウェブページ「くぼたまさと・どっとこむ」<http://www.kubota-masato.com/>（2017年11月9日確認）。Twitter「@kubota_waku」（2017年11月9日確認）。
- (2) 齋藤慶子・吉崎静夫・唐澤るり子・渡邊巧・田中雅文「唐澤富太郎と博物館－学校教育・社会教育における博物館利用の可能性－」『人間研究』第53号、2017年、pp.67-79。
- (3) 2017年度前期「プロジェクト実践演習Ⅱ」の講義計画（シラバス）より引用。
- (4) 当初のプログラムでは、冒頭で学科長挨拶を紹介する予定であったが、当日の運営上の都合により、実際には講演の最後に代読された。